

# 技術社会と人間

—ジャック・エリュールの技術論—

竹 中 正 夫

- (一) 問題提起
- (二) 技術革新についての論議
- (三) ジャック・エリュールの背景
- (四) 「今日の技術」の定義
  - (1) 技術と機械
  - (2) 技術と科学
  - (3) 技術と組織
- (五) 「今日の技術」の性格
- (六) 評価 — キリスト教倫理との関連

## (一) 問題提起

1966年7月 ジュネーブで開かれた世界教会協議会主催による教会と社会の国際会議は「現代の技術的社会的変革におけるキリスト者」というテーマを主題としてかけ、2週間にわたって開催された。そこでとりあげられた多くの問題のなかで、つぎの二つの点が、その主題から言っても強調されたのは当然のことであった<sup>1)</sup>。その一つは、めざましい技術革新の可能性を現実のものとし、人類の福祉のために活用しようとする主張であった。この問題を具体的にとりあげたのがいわゆる南北問題である。そこでは、富める国と貧しい国の経済的格差がこのままでゆくならますます拡大することが指摘され、富める国々が貧しい国々の開発のために責任を果すことの急務が力説された。それ以後この問題は、ローマ・カトリック教会との提携の下に SODEPAX（平和と社会開発委員会）として一連の会議が世界の各地で開かれるようになったことは周知の通りである<sup>2)</sup>。アジアでは、1970年7月に東京の聖心女子大学において SODEPAX と EACC（東アジア・キリスト教協議会）ならびにローマ・カトリック教会の3者の共催によって、アジアのエキュメニカルな開発会議が開

かれ<sup>3)</sup>、「解放・正義・開発」というテーマの報告書が出版されている。

ジュネーブにおける第2の強調点は、社会的変革の問題であった。ここでは主として、ラテン・アメリカと、南アフリカというような革命的状況にある国々の課題がとりあげられた。ブラジルの政治的・社会的状況を背景にして「革命の神学」を論じたりチャード・ジョールの論文はその代表的な例であった<sup>4)</sup>。これは、すでに民主的な参与の道や非暴力的な方法による試みが全く通じなくなっていて、いわば限界状況における革命の課題を扱ったもので、西欧やアジアの状況では、社会変革の必要性は認められても、同様に論じることの出来ないものがあつた。ヒットラーの下にあるドイツと、今日のブランド政権の下における西独の相異や、第2次世界大戦下における日本と、今日の自民党政権の下における日本には、社会変革を必要とするという点では同様であっても、その内容や方法においては、可成りの相異があり、もっと綿密な論議がなされなければならない。しかしこの小論では、主として技術論について論じたいと思うので、社会変革の方法については、別に論ずるときをもちたいと思う。ジュネーブ会議においては、反体制的過激暴力革命運動の課題が表面にあらわれ、それは、南米や南アフリカのような極限状況において妥当することはあつても、西欧社会やアジアの国々でもっとちがったアプローチがなされる必要のあることを指摘しておきたい。さらに一言つけ加えるならば、60年代の後半、ヴェトナムと黒人問題で可成り過激化した米国の社会運動が、急進化し挫折や両極振幅を経験し、今回の大統領選においてみられるように草の根の組織化を通して推進する若い力が生れつつあることは注目すべきことである。その点で今回の米国の大統領の選挙は、その結果よりそのプロセスに重要な意味があるように私は思っている。

都市の貧民層の人権擁護のため住民組織の運動を推進したソウル・アリンスキーは、昨年6月12日、64歳の生涯を終えたが、彼は、いわゆる過激な青年たちから体制内変革論者として罵られてもちっとも屈せず、むしろ、現実的な洞察と、人々の共感し得るユーモアをもって人民を組織する民主的運動の展開を主張した。彼の主著「過激派のための法則」<sup>5)</sup>は、前回の大統領選のとき、シカゴの民主党の大会へのプロテストにあつまった青年たちが、シカゴ市長のさ

しむけた警官隊によって、惨めにも弾圧されて、挫折感を味わっていたときに、書かれたものである。彼はこういつている。

「あなたたちはつぎの三つの一つを選ぶがよい。一つは、どこかに、嘆きの壁をみつけて泣き悲しむということ。第二は、狂暴になって、爆破活動に走る道が考えられる。しかし、その結果として、社会全体は右翼を支持するようになるだろう。第三の道は、今回の経験から教訓を学ぶこと。それぞれの地域社会に帰って組織づくりをし、勢力を結集し、つぎの大会にはあなたたちが代議員となること」<sup>6)</sup>

フェンズムに至る道を憂う人は多いが、それに対応する道は必ずしも一樣なものではない。もとより、それぞれの状況の現実的な分析とそれにふさわしい運動が独創的にすすめられねばならない。そして、可成りの自由と人民の参加の可能性のある現在の日本においては、人民の意識の喚起と人民の組織化による不断の変革を志向する道がきわめて重要なものと思われる。それは、きわめて身近かな日常性のなかから問題を一緒に考えてゆこうとする地味な働きであり、体制内であって、具体的な問題の解決のために、ひとびとの力を結集してゆこうとする運動である。

このような問題の意識に立って、現代の技術社会の基本的性格について現実的な把握をなすことが必要であると思う。

## (二) 技術革新についての論議

技術革新については多くの論議がなされており、ここでそれを詳しくそれらについて論ずることは出来ないが、本稿において主としてとりあげたいと思うジヤック・エリュールの技術論を理解するためにも、ごく限られた形であるが、2・3の点に触れておく必要があると思う。

先述の1966年のジュネーブ会議においては、大別して4つの技術論があった。第1のものは、ハーバード大学のエマヌエル・G・メスセネ<sup>7)</sup>教授に代表される楽観論であり、その根本には、人間の合理性と自覚性についての強い確信があった。技術革新は人間に新しい問題を投ずるが、人間は技術の進歩によって、自由と繁栄を獲得するであろうという合理的ヒューマニズムの主張であ

った。この考え方からするなら、教会は、技術革新についての誤解や偏見をすてて、技術が人間の解放に与える可能性の芽をつみとらないようにする責任をもつことになる。第2の立場は、技術を経済的な生産の向上の手段としてとらえ、これを経済の成長とくに、貧しい国々の開発の目的に適合しようとするものである。たしかに、各国のGNPを引き上げるために、技術革新は重要な要因である。それ故に、富める国々は、貧しい国々の経済的開発のために責任を果し、南北のギャップを縮める必要のあることが力説された。ここでは、技術は主として生産の量を増加させ、経済的財貨を増殖し、労働あたりの能率を増大する手段としてみなされている。

以上の二つの見解は技術に対する楽観的見解を共有しているのに対し、つぎの2つの立場は批判的な立場に立っている。一つは、アフリカのナイジェリアの経済学者S・A・アルコールに代表される見解で、それは、いわゆる「貧しい国々」の技術社会に対する憂いをあらわしている。すなわち、技術は人間に福祉をもたらす可能性のあることは事実であるが、同時に、技術社会が社会に分裂をもたらす危険性を指摘している。

「開発途上の国から来たものとして、技術の現代的な傾向のもつ意義について、わたしは、懐疑的になりつつある。わたしは、月や宇宙への探検と聖書におけるバベルの塔づくりの間に類似したものを見るのである。天にとどく様なバベルの塔が築かれたとき、十分な住む家もない多くの人々がいたにちがいない。今日、月や宇宙を支配しようと巨額の富がつかわれている反面、多くの人々がこの地上ではなお飢えているというのが現状である」<sup>9)</sup>

ジュネーブ会議で技術に対する批判的な見解をのべたもう一人の代表がここで扱おうとするジャック・エリュールであった。彼は、技術の中には、善と悪との両者が共存していることを指摘し、技術の進歩によってすべては善くなると考える安易な楽観論を排すると同時に、技術のもたらす巨大な新しい課題の前に、過去の精神的倫理的伝統を全く放棄して下うという現代の傾向にも反対している。それでは、エリュールは如何に技術社会の構造をとらえ、いかにその性格を特色づけているのかについて考察してみることになろう。その前に、先づエリュールとは一体どういう人であるかについて簡単にふれておく必要が

ある。

### (三) ジャック・エリュールの背景

ジャック・エリュール(Jacques Ellul)は1912年、南フランスの港湾都市であり葡萄酒の産地として知られているボルドゥー(Bordeaux)で生れた。彼の母親は、キリスト教徒であったが、父はヴォルテール(Voltaire)の思想に共鳴をし、かつ無神論者であった。彼の家は極めて貧しかった。少年時代は、ボルドゥーの港湾ドックの労働者が住んでいる地域ですごした。彼は少年時代から働きながら学ぶことを当然のことと考えていた。16歳のときらい仕事をしながら勉学をし、大学にも働きながらかよった。彼は、ボルドゥー大学とパリー大学で社会制度史について学んだ。19歳のとき、はじめて、カール・マルクスの「資本論」をよみ、かねてから自分が問題としていたことが論じられているのに深い感銘を覚え、それらいマルクスの著作をよみあさる。マルクスの書いたものには共感するが、スターリニズムによって代表される現実の共産主義者たちには失望をする。彼らは、マルクスを論じながらも、マルクスから遠くかけ離れているように思う。22歳のとき、聖書をよみ、一種の野性的な改信の経験をなす。

それらい、マルクス主義者でありかつキリスト者であるという問題を考えてつづける。理論的というなら、両者を両立することは難しいので、彼はキリスト教信仰をとる。しかし、政治的・経済的・社会的問題を把握する視点をマルクスに学ぶ。すなわち、資本主義社会における人間の非人間化の状況を批判的にとらえる視点をマルクスに学ぶ。彼は聖書は、社会に対する人間の責任を指示しているが、聖書の教訓から社会問題に対する答えを直接に引き出すことを期待しなかった。一方においては、社会学者として、現実の社会現象を批判的に検討分析し、他方においては、聖書に根ざして、深く人間の本質とその在り方を解明し、その両者を彼自身の体験の中につきあわせるようにつとめた。

1933年から友人たちと雑誌 Esprit の編集にあたるが、仲間の或るものは、きわめて形式的な社会主義に走り、またある者は、固陋なカトリック主義をとるのをみて、それと訣別して自らの道を独り歩むことにする。当時ヨーロッパにはキリスト教社会主義の運動があったが、それが、神学的には深味がな

く、社会学的にも皮相なものであることを知ってそれらには入らなかった。

1937年には、ストラスブルグ大学で教鞭をとるようになり、研究主任をつとめるが、ヴィンナー政権によって罷免される。1940年から44年にかけて、ドイツに対する抵抗運動の指導者として活躍する。1944年にボルドゥー大学の教授として迎えられ、今日に至っている。彼が専攻している領域は、社会制度の歴史とその社会学的検討 (History and Sociology of Institution) であり、彼は、社会学、法学、歴史学の領域で学位を得ている。彼の著作はすこぶる多岐にわたり、合計25冊を数えるが、その中、社会制度史に関するものが5冊、社会学に関するものが10冊、神学または聖書のテーマを扱ったものが10冊を数えている。その中主なものをげるとつぎのようなものがあげられる。

## I 制度史に関するもの

Histoire comparative au recrutement militaire en France du XVIe au XVIIIe siècle, 1941 (Prix de l'Académie Française)

Introduction à l'histoire de la discipline des Eglises réformées de France, 1943

Histoire des Institutions de l'Antiquité (2 vol.), 1951-1952

Histoire des Institutions françaises (3 vol.), 1953-1956

Histoire de la Propagande, 1966

## II 社会学に関するもの

La Technique ou l'Enjeu du siècle, 1954 (The Technological Society, 1964)

Propagandes, 1962, (Propaganda, 1965)

Les Relations Publiques, 1963

L'Illusion politique, 1965, (The Political Illusion, 1967)

Exégèse des Nouveaux Lieux communs, 1966, (A critique of the new  
common places, 1968)

Métamorphose du Bourgeois, 1967

Autopsie de la Révolution, 1969, (Autopsy of Revolution, 1972)

De la Revolution aux Revoltes, 1972

Jeunesse delinquante, 1971

Les Religions Sèculieres, 1972

### III 神学に関するもの

Le Fondement théologique du droit, 1946, (The theological foundation  
of law, 1953)

Présence au Monde moderne, 1948, (The Presence of the Kingdom,  
1954)

Le Livre de Jonas, 1951

L'homme et l'argent, 1953

Fausse Présence au Monde moderne, 1963

Politique de Dieu, politique des hommes, 1966

Violence: Reflection from a Christian Perspective, 1963

Le Vouloir et le Faire, (T.I.), 1969, (To Will and To Do, Part I of  
vol. I: Introduction to a Christian Ethics, 1969)

Prayer and Modern Man, 1969

The Meaning of the City, 1970

エリュールは、比較的小柄なしとやかな体をしており、その語り方もひかえ目であり、地味な性格をしているが、きわめて、主体性をもった独自の学者である。彼の特色は一方において社会の制度、機構を現実的な視点から批判的に分析しながら、他方においては、聖書に根ざして人間の存在についての理解を深めている点にある。彼は、社会学的な分析から安易な理想社会の図式やブループリントをえがこうとはしない。あくまでも社会学者としては、批判的に現実を分析し叙述しようとする。その根底には、人間は、めざめて課題にこたえる存在であるという人間理解が内在しているように思われる。

エリュールは、フランスの改革派教会に属し、信徒の研修のプログラムに参画し<sup>9)</sup>、フランスの組織神学者ボスク(J. Bosc)のあとをうけついで Foi et Vie (信仰と生活) 誌の編集の責任を担当している。また、1946年から53年にかけて世界教会協議会の「労働」についての委員をつとめたのをはじめとして、エキュメンカル運動において貴重なる貢献をなしている。



## 「今日の技術」の定義

エリユールは、技術論を展開するにあたって、つぎの3つの点から現代における技術の問題を考えるべきことを提唱する。第1の視点は、技術と機械について、第2は技術と科学について、そして第3には、技術と組織についてである。これらについて彼の主張を紹介し若干の説明を加えることにする。

### (1) 技術と機械

広い意味において機械は技術の一部である。通常われわれは最も素朴な活動の手段として道具を考える。そして道具に動力をつけたものを機械と考えている。手の延長として鋤を用うことは道具の段階であるが、やがてそれに動力がつくと耕作機となり自動的な回転をして畝を耕す機械となる<sup>1)</sup>。ついこの間までわれわれは技術を機械としてとらえてきた。それは、主として、経済的な領域において用いられ、素朴な道具に代って手段の効果を量的に高めるものであった。

しかし、エリユールによると、現代の技術は、より広汎な領域において決定的な影響を人間に与えていることを指摘し、この点において、前時代の機械とは、質的に異った性格をもつようになって来ているとのべる<sup>10)</sup>。

たしかに、19世紀において機械は、大きな影響力を当時の人々に与えた。しかし、それは、主として経済の分野とくに産業社会の領域に限られており、機械が19世紀の社会を統合する力にはなり得なかった。しかし、現代の技術は、現代社会を全体にわたって支配する力となっている。技術の歴史を究明したルイス・マンフォードは、「機械は非社会的」であるといった。しかし、今日の技術は、きわめて社会的に人間の全領域にわたって人間を合理的に支配しつつある。技術が機械としてとらえられていた段階においては、「人間と機械」という形で、人間は機械を対象としてとらえることが出来た。しかし、今日の技術は、人間の全領域において、独立した力を持ち、人間を外側から併合する巨大な力となりつつある。ここに機械と今日の技術との間には決定的な質的な相違のあることをエリユールは力説する<sup>11)</sup>。

「機械を手段の効用をより高めた形体としてとらえるならば、今日の技術は

この形体をいままで機械が全く適用されなかった全生活領域にあてはまるものである。それ故に機械と今日の技術が連続的なものであると考えることは、基本的な誤りである」<sup>29)</sup>

ある論者は、技術論を展開するにあたって、技術の弊害は資本主義社会に起因するものであるとし、資本主義社会が変われば、技術の弊害も除去されるであろうと説く。エリユールによれば、もし今日の技術が経済の領域に限られているなら、資本主義社会が変われば、なくなるかも知れないが、それは、社会全体にあたって、人間を合理的効率的に拘束する巨大な力となっており、資本主義社会のみでなくいわゆる社会主義社会においても、明確にあらわれている傾向であることを指摘し、現代の技術の問題の根がいかに深いものであるかをのべている。

## (2) 技術と科学

通常科学と技術の関係について、つぎの様な見解がなされている。「科学とは、人間と人間をめぐる世界についての知識であり、技術はその知識をある目的のために応用したものである」という理解がある。ここから、まず、科学的理論が発見され、その理論を現実の用途に応用して技術が生れるというプロセスが考えられている。たとえば、イギリスの物理学者、C・A・クルソンは科学的理論が発見されて、技術的応用が完成するまでの年月が、今日においてますます短縮しつつあることをのべている。

「マイケル・ファラディが英国の王室研究所の実験室において電磁石の研究において巻きつけた針金が電流を通すことを発見してから、電動モーターとして商品化されるまでに50年を要した。レントゲン線が発見されてから、それが医学の領域で広く用いられるようになるまで25年かかった。また、原子核の分裂の理論の発見から、最初の原子のサイクルが出来上るまでには12年を要した。原子爆弾について理論が確認されてから、それが実際に用いられるまでに7年を要した。無線のラジオの理論の発見からトランジスター・ラジオの商品化までわずか3年しか要しなかった」<sup>30)</sup>

これらの事件を通してクルソンは、科学的理論の発見からその技術的適用までに要する年月が短縮され、科学技術の進歩がいかに顕著なものであるかを

説明している。クルソンは、今日の科学と技術との緊密な関係を指摘しているが、彼のとらえている方向は科学理論の発見から技術的適用という方向である。

これに対してエリュールは、そのような方向は、19世紀的な見解であり、今日においては、むしろ技術が科学的研究にあたっての基本的前提条件となっていることを指摘する。今日においては、科学と技術の厳密な限界がなくなりつつあるのみでなく、科学の研究そのものが巨大な技術の力に依存するようになっている。今日の多くの科学的研究は、個人の科学者が孤立してなすのではなく、巨大な研究設備や巨大な研究費を用いて、プロジェクト・チームによって行われることが多い。システム・エンジニアといわれるように、技術体制が科学的研究に先行するようになってきている。技術的な体制が整備されていない場合には、科学的な理論が発見されないということになる。それ故、今日、有力な科学者は、技術的な設備や組織のすぐれている場所において研究をするようになっている。

この様な傾向が強くなるにしたがって、今日厳正中立な立場から科学的研究をすることが困難になってきている。彼の研究を維持してゆくためには、巨大な経費と設備を科学者は必要としており、それを受け入れることによって、彼は自らに要請されている課題に答えるようになる。「科学は次第に巨大な技術的体制の手段となりつつある」<sup>14)</sup>とエリュールは警告する。

### (3) 技術と組織

かつての技術は、職人的熟練によってなされることが多かった。そこでは、多少は同業者の組織があったが、多くの場合は、技術は個人的関係において習得され保持されていた。しかし、現代の技術は個人的な関係や小グループでは到底維持出来ない。それは巨大な組織を必要としている。

かつて、アーノルドトインビーは、歴史を大別して、①原始時代 ②技術時代 ③組織時代、という3つの段階に分けた。エリュールは、今日単なる機械的な技術が、支配的でないという点では、トインビーに同意し、現代社会においては、組織の占める役割がきわめて重要になってきているとのべている<sup>15)</sup>。しかし、彼は、トインビーは今日の技術とかつての機械の間に相違を認めない

ため、今日の技術が、必然的に巨大な組織と結合して、総合的な影響を社会の全領域に及ぼしていることを見落しているとのべる<sup>16)</sup>。組織は、その働きにおいて、それぞれの個人やグループに任務を与え、最も有効にして合理的な方法でそれらを結集し集約してゆくものである。そこから合理化や、標準化というような管理形体が今日の技術社会の組織に支配的にあらわれてきていることが理解されよう。今日の技術の重要な性格はこの点にあると言ってもよい。すなわち、技術が組織と一体となって、普遍的な影響力を全領域においてもつ様になりつつあるということである。

上述の叙述で明らかのように、エリユールが問題としている技術は、原始社会の「道具」や近代社会の「機械」ではなく、現代における技術である。彼は技術論の冒頭において、今日の技術をつぎのような定義においてあらわしている。

「わたしが、ここでいう今日の技術とは、通常考えられる、機械や技術ではない。一つの目的に到達するための一つの手段ではない。現代の技術社会においては、今日の技術は、合理的にはかられた手段の総体であり、それは、人間のすべての活動領域において決定的な効用をもつものである」<sup>17)</sup>

多くの技術論が、主として生産手段の効率を中心に構成され、経済的領域を主要な領域としてとらえているのに対して、エリユールの技術論は、今日の技術を取り上げ、かつては領域の手段であったものが、人間社会の全領域にわたって、全人的影響と支配をもたらすようになっている実態とプロセスを把握しようとしているということが出来ると思う。

エリユールは「今日の技術」についての考え方を明確にするために、「技術的過程」(technical operation)と「技術的現象」(technical phenomenon)の両者を区別する。前者は、目的に到達するための手段を意味している。特定の目的に到達するために、それにふさわしい手段が考究され、より能率的な手段が選ばれ用いられている。これが、技術的過程であり、通常技術といわれている。

しかし、この技術的過程に二つの要素が介入してきている。一つは、意識性(consciousness)であり、他は、判断(judgement)である。技術的過程は、

比較的無意識的にそして自発的に進められてきた。しかし、人間は、理性的な判断を用いてその手段の効率を検討し、多くの手段の中から最も能率の高い手段を選ぶようになる。ここから、技術的過程が技術的現象に向うようになる。とくに、今日の技術においては、能率の効用が、すでに前提とされた目的となっており、それに向って、理性的判断が加えられるということになる。

さらに、技術的な過程においては、自然発生的であり、断片的であった技術が、意識性が介入することによって、計画的・かつ集約的となる。最も有効にして能率の高い技術を選んで、それを結集し組織化して行く傾向が、技術的現象には意図的にあらわれてくるようになる。総合的な今日の技術の領域をエリユールは、つぎの3つの分野に分けそれぞれ詳細な検討を加えている。

- (1) 経済の領域（生産、労働、経済計画など）<sup>18)</sup>
- (2) 政治的組織（国家、政党、行政、戦争、軍備など）<sup>19)</sup>
- (3) 文化的領域（医療教育、報道、宣伝、スポーツ、レジャーなど）<sup>20)</sup>

このように「今日の技術」についてのエリユールの論述は、抱括的な領域に及び、人間に対する現代の技術体制の影響をトータルにとらえているといつてよい。このような視点は、わが国の大学問題の中で断片的に出て来た問題であった。またアメリカでは、ハーバード大学の経済学者J・K・ガルブレイスの「新しい産業国家」<sup>21)</sup>などの著作においてみられる視点であるが、これらはいづれも、60年代の後半であつて、エリユールがすでに1954年に現代の技術の性格を総合的にかつきわめて批判的にとらえている点において注目すべきものがあると思う。

#### Ⅵ 今日の技術の性格

エリユールは、技術の歴史をさかのぼって述べ、現代における技術の性格について論及している<sup>22)</sup>。「今日の技術」の性格を理解するには、「伝統的な技術」と対比してみると参考になる。

人間は古くから技術を用いて来たが、原始社会では、主としてある特定の限定された領域において技術を活用していた。すなわち、狩猟、農耕などの経済的な生産の領域と、戦争や消費部門において技術が用いられていた。原始社会

において社会を総合的にとらえていた力は、呪術的な営みであった。それも一つの呪術的技術 (magical technique) と言えるが、人間の合理に立つのではなく、むしろ人間の非合理性を前提としたものであった。

封建的社会になると、生産や戦争の領域における技術は存続し、多少の進歩改変をとげていったが、原始社会全体を支配していた呪術的な形態は社会的なとくに政治機能によって代替されていった。そこで重要なことは、自己の属する集団における人間関係であり、家族、氏族、部族、国家などの集団が人間に決定的な影響力をもっている。封建社会においても技術は用いられていた。それらは、経済や軍事力の領域に限定されていたのみでなく、その性格を「今日の技術」と比較するとき、いくつかの点で興味深い対象点を見出すことが出来ると思う。

第1に古い時代の技術と「今日の技術」の対比として考えられることは、「安楽」(confort) についての考え方である。現代人は何に安楽を見出すかという、お湯の出る風呂場であるとか全自動の洗濯機や冷房装置などをあげることが多い。それらは、技術的手段を用いて、人間の労力をはぶいて、肉体的に安楽をもたらすことを意味している。そしてこれらは、きわめて物質的な安楽である。

これに対して中世の人々は、何に安楽を見出したであろうか。昔の人も、物質的な条件に関心をもっていたことには変りがないが、むしろそれに伴う倫理的な、そして美的な雰囲気に関心をもっていたといえる。

たとえば、家を建てるにあたって、現代人は機能的な便利さ (functional convenience) に重点をおくのに対して、中世の人々は、空間的なゆとりを楽しんだ。生活には多少不便であっても、あまりごたごたと器具や家具を室内におかず、空間の余裕をたのしんだ。便所・浴室・暖房装置・厨房などは、今日家を設計するとききわめて重要な要素となっている。それは人間の生活に機能的な便利さを提供するものであるから、家の中でも用いやすい場所にとり入れられている。之に反して昔の建築では、便所や厨房や浴室は非常に不便なところにおかれている。中には、履物をはきかえて出て行ったり、渡り廊下で行くような例が少くない。日常生活における不便さはあっても、母屋の居室は

なるべくゆとりをもった広びろとした雰囲気をかもし出すように配慮されていた。

中世の研究家であるギディオソ (Giedion) によれば、中世の人間は、つねに死をおそれており、自分の死ぬ場所を考えていた。技術を用いて対象を変化させたり克服することを考えるより、自分に与えられた空間をなるべく整え、美しく保つことによっていつ来るとも限らない死の準備をしていた<sup>29)</sup>。中世の社会において技術が適応される領域はきわめて限定されており、日常の生活はきわめて不便なものがあった。技術を用いて機能的な便利さを獲得しようとする現代人にはみられないゆとりと美的な感覚があったように思われる。

第2に、伝統的な技術においては、技術的道具を用うる人間の熟練が要求され、道具自体はきわめて素朴なものであった。技術的道具を用うるものを職人とよんだが、彼は素朴な道具を十分に用いて最大の効果をあげることの出来る技術をもっている人であった。道具の用い方が熟練であり、技術であった。その技術は個性のあるものであり、習得するには可成り長い年月を要した。それは秘伝として個人から個人に伝えられて行った。

今日の技術は、目的に応じて多種多様な道具をつくり出してゆく。道具の多様化によって、人間の熟練度は減退してゆく。技術が整備され巨大な機構となって集約化されるにしたがって、人間はその手袋に用いられてゆくようになる。

第3に伝統的な技術は、地方の独自性をその特色として有していた。交通や通信機関が今日のように発展しなかった昔においては、技術の伝達はゆるやかであった。技術的現象は、それぞれ孤立していた。技術はその文化の一少部分にすぎないのみでなく、その文化の影響圏を超えて、他の文化圏に浸透したり、交流をすることにきわめて稀であった。技術の伝達は、横の関係ではなく、縦の関係、たとえば世襲や家伝や秘伝として、世代から世代に、同じ集団に属する親方から徒弟へと伝達されていった。ここから技術が、地方的なものとして密着して行ったことは当然なことであった。

ところで今日においては、技術の伝達はきわめて迅速に行われると同時に、大量の生産と合理的な測定により、技術は地方的な個性を失い一般的な普遍性

をもつようになってきた。

たとえば、わが国の陶器の生産において、かつては、地方の独自の粘土と色彩をもった民芸が庶民の日常生活において用いられていた。しかし、近代技術の発達によって、集中的な大量生産が行われ、地方の個性をもっていた民芸作品においてさえ、普遍的な一般化が行われるようになってきている。

昔は、ふらりと旅に出てその地方独特の風物を見、土地の産物を地酒と共に味わいその地方の人々の情緒にふれるのが、旅人のよろこびであった。ところが、現代では、あらかじめ旅行会社によって企画された観光ルートによって旅行がパッケージになって行われる。どこに行っても同じような食事がセットとなって出てくるし、同じようなレジャーセンターやみやげ物の店が並んでいる。ここにも、旅が技術社会においては観光となり、地方の独自性が少くなり普遍的画一性が多くなってきていることが指摘されると思う。

それでは、今日の技術においては、普遍化の傾向と画一化の傾向のみであって、多様化の傾向はないのであろうか。そこには多様化の傾向は存しているが、それはちがった形であらわれている。今日の技術においては、能率をあげるために、合理的な組織化（rational systematization）が行われる。そこで要求されることは、特定の状況における運動の能率をあげるために最も有効な道具を用いるということである。特定の道具がその特定の目的のためにのみ限定して用いられるようになってきている。すなわち、地方的な多様性がなくなってきたのに反して、道具の多様性が増大してきた。別なことばで表現するなら、個性をもった人格的多様性が稀薄になりつつあるのに対し、特定の目的にしたがって手段の効率を高める技術的多様性が進展しつつあるといってもよいと思う。

エリニールは、技術的多様性の例として飛行機の生産形態についてのべている<sup>24)</sup>。飛行機は、その用途にしたがってますます多様な種類に分けられるようになってきている。大別するとつぎの5つのグループに分けられる。

- (1) 戦略爆撃機
- (2) 戦術爆撃機
- (3) 追撃機



## (4) 偵察機

## (5) 輸送機

さらにこれらの5つの種類がその内部では13の種類に細分されて、それぞれちがった目的のために供せられているのである。同じような細分化と多様化が他の領域に存在している。

第4に、伝統的な技術と今日の技術を比較するとき人間に与えられている選択の自由について著しい差があらわれてきていることが指摘される。

技術の進歩にともなって、人間の用うる道具の能率が高くなり、社会に活発な進歩がもたらされたことは事実である。さきにのべたように、19世紀までの世界にあっては、技術の占める領域は、きわめて限定されており、個人は、技術に対して、それを受けないという自由をもっていた。そこでは、技術によらないで素朴な生活をすることもある程度可能であった。たとえば、可成り技術的には発達していたローマ帝国において、技術の影響を受けずに素朴な生活を営むことは可能であった。ローマ法の下では、個人が、兵役を回避したいようなときは、さして強制力を発揮することは困難であった<sup>25)</sup>。

しかし、今日の技術は、社会全体の領域において支配的な力をもっており、個人はその影響力から避れることはきわめて困難になってきている。技術は、手段の能率を高めるために合理化を要請し、その間にあって、個人の選択の自由はますます狭くなり、技術が集中的に巨大化するにしたがって、個人の全領域が技術によって支配されてゆく傾向が強くなっていると思う。

エリユールは、人間の真の進歩は、人間の自由と技術的効率の両者が相ともに両立するときにはじめて存在するとのべている<sup>26)</sup>。素朴な生活をしていたアフリカの原始民が、米国に奴隷として渡ったとき、アフリカの生活にはなかった技術的な効用に与かることが出来たが、人間としての自由を失って了った。ということは、技術と人間の自由との両者が歴史の進歩のために必要であることを物語っていると思う。今日、われわれは、日進月歩の技術の進展を目のあたりに見、それによって手段の効率を上げているが、巨大な技術的体制の中にあって個人の人格的選択や自由の巾が狭くなってきていることも事実であり、ここに今日の技術と人間の重要な問題点が存在していることがうかがわれるの

である。

## （六） 評価——キリスト教倫理との関連

以上わたしは、ジャック・エリュールの技術論の骨子を、多少わたし自身の解釈を加えながら紹介してきた。ここに、その特色をキリスト教倫理との関連においていくつかの点から吟味してみたいと思う。

### （1） 批判的叙述

エリュールのいう技術（technique）は、一般にいう技術（technology）とは異り、「今日の技術」である。かつての技術が、社会の一領域において存在していたのに対し、現代の技術は、全領域において、きわめて総合的な影響を現代人に与えている。「今日の技術」は、合理的な効率を至上目的とし、人間の見る選択をますます少くし、一つの画一的な普遍主義に立ち、諸領域にわたっての相互の連繋性を保ち、ますます独立した自立性をもって現代社会に君臨している状況を克明にえがいている。

この点において、エリュールの技術論の第1の特色は、きわめて総合的であると共にきわめて批判的な視点から叙述がなされていると言ってもよいと思う。彼は社会科学者の責任は、現実の社会的状況について実証的な叙述をなすことであり、とりわけ、人間性の尊重という視点から現実を批判的に分析し検討することとしてとらえている。エリュールは、技術論を展開するにあたって、その解決策や未来の展望を論ずるのではなく、現在の状況を分析し、人間の自由の視点から検討し、問題に対する喚起をうながしている。この場合、エリュールがとりわけ批判的に指摘していることは、現在の技術が巨大な組織的体制となって、全領域にわたって合理的画一性を主張し、人間の自由と個性が次第に稀薄になりつつあるという事実である。このことは、現代社会における宗教にとってきわめて重要な意味をもっていると思う。なぜならば、宗教は、最も深い意味において個としての人間を重んずる領域であるからである。99匹の羊をおいても1匹の羊を追究するのが、宗教の世界であるならば、技術社会において宗教の果す役割はきわめて重要なものとなってくると言ってもよいであろう。

## (2) 決定論と自由論

人々は、エリュールの技術論はあまりにも悲観的であり、人間に及ぼす技術の否定的な側面を強く出しすぎており、人間は巨大な技術の自律的傾向に対してなんらなすべがないのではないかといった印象をもっている。つまりエリュールの立場には運命的な決定論の色彩が強いではないかという問いがある。

たしかに、エリュールは、楽観的な技術論を展開しないし、一時の未来学者のようにバラ色の未来をえがかない。彼は、現実を批判的に分析することによって、人々の注意を喚起しようとする。彼は、今日の技術がもたらしている問題を出来るだけ正確にとらえることによって、それに対して適切な対応をとることが出来るように配慮している。彼は、「技術社会」の冒頭でつぎのようにいっている。

「今日の技術は、多方面にわたる問題を提出している。基本的な分析を誤るならば、その解決策を論じても無益なことであろう。それ故に、解決策を論ずる前に、その現象についての正しい分析をなすことが必要である。」<sup>27)</sup>

エリュールの究極的な関心は人間の自由と尊厳を守ることにある。この点でも彼は、個人の独自性を重んずるフランスの人権思想の系譜をついでいる、とあってよい。人間の自由は、抽象的にとらえられるのではなく、いつも現実の社会的必要との関係においてとらえられるとき、自由はリアルな命題となる。彼は、人間の社会的現実の中に、自由と必然の弁証法的な葛藤をみる。自由は不変の法則であったり、不動の原則ではなく、現実の必然との葛藤の中に働いているものである。彼はこのことをつぎのように述べる。

「人間の本質の中に自由が宿っているということは、人間は本質によって拘束されており、それに従うときに自由であると言うにひとしい。これはまさに自己矛盾である。われわれは、自由か必然かという形で物事を考えてはならない。われわれは、両者を弁証法的な関係においてとらえなければならない。たしかに人間は必然的な限定の中にあるが、しかし、その必然性は絶対的なものではなく、それを克服する道も開かれているのである。それこそが自由の働きである。自由は、静的な概念ではなく、動的な働きである。すでにかちとった権益ではなく、つねに追い求められたからである。人間が立ち

止って、自分の責任から逃れるとき、彼は決定論のとりことなるであろう。自由の中に安住していると思う人は、実は最も奴隸的な存在なのである。」<sup>289</sup> 彼は、技術社会の問題の解決は少数の専門家に委ねられるべきでなく、現代社会のすべての人々がその責任を果しあうことにありとし、各自がそれぞれの領域において創造的に技術社会のもつ、方向を変えるようにカミ合わせることを提唱しているのである。

### (3) 技術社会におけるキリスト者

エリユールの「技術社会」は主として社会学的分析であって、そこではキリスト者の責任について論じていない。彼は技術社会が提出している課題に対してキリスト者はいかに生きるかについて他の書物で論じている<sup>290</sup>。とくに、エリユールが重視していることは、キリスト者が、この時代に一つの「生きる姿勢」(A Life Style)を形成することである<sup>291</sup>。彼は、人間のキリスト者の姿勢として聖書に証されている啓示の光の下に、現実の世界の状況に対して「めざめている姿」<sup>292</sup>そして、自分の具体的におかれている生活の場において、「ねばり強くあきらめずに戦う姿」<sup>292</sup>などを示唆している。「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト、イエスによって捕えられているからである」<sup>293</sup>というパウロの倫理は、めざめながらこの世において自分の使命にむかって励むキリスト者の姿勢を示唆していると思う。その姿は、一人だけの努力ではなく、キリスト者の共同連帯的な交りによって互に支えられるものであり、教条的に固牢になった姿ではなく、終末を待望する、ユーモアと希望の中につづけられる歩みなのである。

### (4) 聖書と技術

エリユールは「技術社会」を出版したのち、そこにおいて提出されている課題についての神学的解明をするために1冊の書物を書いた。それが「都市の意味」である<sup>294</sup>。同書においてエリユールは、旧新約聖書において都市と人間、技術と人間がいかに扱われているかを刻明に論述している。それによると都市をはじめて築いた人は、エデンの園を追われたカインであり、彼は弟アベルを殺し、神からのろわれ、さすらいの人となった者であった。カインはエデンの東、

ノドの地に移って妻をめとり、子供を与えられエノクと名づけ、町を建設してエノクと名づけた<sup>85)</sup>。エノクとは、はじめおこす (initiate) という意味である。神の意志に反して罪をおかした人間が、自分自身の能力を基盤としてうち建てたものが都市であり、それは人間の虚栄と退廃を反映している。それ故に、聖書には都市に対する呪いのことばの多いことをエリユールは指摘している。同様の例をバベルの塔を建てたニムロデにみる事が出来る。彼は、「主の前に力ある狩猟者であった」<sup>86)</sup>。ニムロデは、世の権力者となった最初の人であり、今日の技術社会の支配者の先駆的存在とも言えよう。ニムロデは彼の側にあっては、神の存在を認めないのみでなく、自らの能力と権力によって他者を支配していた。しかし、エリユールが指摘することは、ニムロデも主の前にあったということ、彼も神の眼の外にはなかったということである。同様に都市をめぐる神と人間の弁証法的関係をエリユールは、ソドム<sup>87)</sup>、ニネベ<sup>88)</sup>、エルサレム<sup>89)</sup>などに見出す。すなわち、人間の自己絶対化により都市に不正と腐敗がみなぎり、神の怒りの対象となる。しかし、神は、都市の不正を憎むが、そこに住む人を愛し、人間に対する約束を忘れず、救いと平安を都市に与える恵みの神であることを聖書は証している。都市の不正と汚濁に対する神の審きは透徹しており、敢えて人間がそれに加える何物もない。また、都市を少しでもよくして神の怒りをやわらげる働きも、われわれには出来ない。こうした中にあって、エリユールは、古代社会の象徴的な都市であるバビロンに捕われていったイスラエルの民に書き送ったエレミヤの言葉に意義を見出す。

「あなたがたは家を建てて、それに住み、畑を作ってその産物を食べる。妻をめとって、むすこ娘を産み、また、そのむすこに嫁をめとり、娘をとつがせて、むすこ娘を産むようにせよ。その所でああなたがたの数を増し、減ってはならない。わたしがあなたがたを捕え移させたところの町の平安を求め、そのために主に祈るがよい。その町が平安であれば、あなたがたも平安を得るからである。……わたしはあなたがたを顧み、わたしの約束を果し、あなたがたをこの所に導き帰る」(エレミヤ29ノ4ー710)

ここで顕著なことは、異教徒のなかに捕われの身にあつて、不正や邪悪にかこまれつつも、神の民に求められていることは、都市から逃れることではなく

その都市を破壊して、別の都市を建てることでもなく、家を建てて、そこに住み、労働に励み、家族を養い育てて、その都市の平和と福祉を増進することにある。これはきわめて日常的な働きであり、別に英雄的な社会革命の道でもない。世俗都市の日常性の中で、神の約束を確信して自分の責任を根気よく果たす人間の姿勢をエリユールは聖書の中から学びとっているのではなからうか。

われわれはエリユールの技術社会についてのきわめて、批判的分析に学ぶと共に、聖書の視点から技術社会の意味を吟味し、その中に生きる基督者の姿勢について理解を深めたいと思うのである。

注

- 1) The Official Report on World Conference on Church and Society, WCC, 1967.
- 2) World Development, The Challenge to the Churches, Official Report of the Conference on World Cooperation for Development, Beirut, Lebanon, April 21-27, 1968.
- 3) Liberation, Justice and Development, Report of Asian Ecumenical Conference for Development, Tokyo, July 14-22, 1970.
- 4) Richard Shaul, "Revolutionary Change in Theological Perspective," in Christian Social Ethics in a Changing World, edited by John C. Bennett, 1965, p. 23ff.
- 5) Saul D. Alinsky, Rules for Radicals, A Pragmatic Primer for Realistic Radicals, 1970.
- 6) Ibid., xxiii.
- 7) Dr. Emmanuel G. Mesthene, Executive Director of the Programme on Technology and Society at Harvard University.
- 8) World Conference on Church and Society, Geneva, July 12-26, 1966, The official report, World Council of Churches, 1967, pp. 15-16.
- 9) Hans Ruedi Weber, Toward A New Christian Style of Life? Laity No. 5, June 1958. Reprints From Nos 2-6, pp. 106-109.
- 10) The Technological Society, pp. 4-7.
- 11) 同上, p. 6.
- 12) 同上, p. 7.
- 13) C. A. Coulson, Science, Technology and the Christian, 1960, p. 26.
- 14) The Technological Society, p. 10.
- 15) 同上書, p. 11. この点においては, James Burnham, The Managerial Revo-

lution. Kenneth E. Boulding, *The Organization Revolution*

- 16) *The Technological Society*, p.12.
- 17) 同書, xxv. ここで重要なことは一般的な「技術」と「今日の技術」と区別されて用いられていることである。前者は *technology* ということばを用いられ、今日の技術をあらわすときには必ず *technique* ということばが用いられている。
- 18) 同書, 第三章 *Technique and Economy*.
- 19) 同書, 第四章 *Technique and State*.
- 20) 同書, 第五章 *Human Techniques*.
- 21) *John Kenneth Galbraith, The New Industrial State, 1967.*
- 22) *The Technological Society*, 第二章 *The Characteristics of Techniques*, pp.64-147.
- 23) 同書, p.67.
- 24) 同書, p.75.
- 25) 同書, p.77.
- 26) 同書, p.77.
- 27) 同書, 序文, xxxii.
- 28) 同書, xxxiii.
- 29) *The Presence of the Kingdom ; To Will and To Do.*
- 30) *The Presence of the Kingdom*, p.59, p.60, p.145-150.
- 31) 同書, p.119.
- 32) 同書, p.140, p.150.
- 33) ビリビ2の12
- 34) *Meaning of City, 1970*
- 35) 創世記, 4ノ15-7
- 36) 創世記, 100ノ9
- 37) 創世記, 18の1
- 38) ヨナ書
- 39) エゼキエル, 16